



巻のぐ

宮嶋羊邨

巻のぐ位新鮮で可愛らしいものはあまり他に多くない。幼い頃買ってもらったボール箱の引き出しに六色、十二色と列べた巻のぐは蠟紙に蔽われて透いてみえた。しっとり潤った感じがすでに大きな魅力であった。

水巻のぐの小さいチューブはきれいなオハギのよう、五、六個を手のひらからころばす気持は迫もよい。歯のような水巻のぐに比べると油巻のぐはまるまるとお腹を張った幼児。それがピンと伸びをしてお腹に詰っている。弾力と光沢のあるお腹には色とりどりの紙を染め二、三の国語で色名が読まれる。

静かなビリジャン、冷たい青、暖い紅手に取れば各々別な重さが、又こちよい。画をはじめた頃も又今でも私は巻のぐを買って来ると暫く巻のぐと遊ばずには居られない。ふたをとってその色調をかぐ。大ていの画よりも巻のぐはきれいな

だ。

青巻のぐ、コバルト、プルシャンブルー、セルリヤン、海の透明を浮べ乍ら、これ等を見る。けしの葉は白緑の粉を吹いている。私はいろいろの緑を買った。エメラルド、ビリジャン、パールクローム、それに強い赤のチューブとかわがるがわる蓋をとってけし畑を描く為に想を練った。緑か青かと逡巡している間に畑のけしは根もとから枯れ色が日々上の方へと緑青色を追い出していった。アマバアにしよう、折角あつめた緑と青とはチューブのまま封じられてしまう。

画を描く前の焦燥といへばそうだが未だ円く張り切ったままのチューブを愛撫し乍ら制作を想う時こそ画かきの第一の希望とたのしさである。今度こそ落付いて描こうとし始めても、そして画面だけは混乱からまだまぬかれていても、巻のぐ箱はやがて魚腸だらけの漁場のように無惨な血糊の間にあの円みに張っていたものがひしゃがれた小さい尻になって互に埋め合っている。パレットの洪水、指先も掌も、腕も着物も、顔も髪も、夏ならば胸から、腹も臍も、足まで巻のぐのハネがある。こんな時はもう切りあげて横臥休憩に限るのだから思い切れない。

巻のぐは、巻のぐで描いた画面は、お菓子のようにもなる、泥壁のようにもなる。鼻クソのようにもなる、鍛治クソのようにもなる、ヤニのようにもなる、ウ

なる。

ドン粉のようにもなる、毛糸のようにもなる、宝石のようにもなる。宝石になることが一番よいわけでもなくお菓子やワドンゴがよい効果を出す場合もあるが概して巻のぐ以上の美しい質に成った時の方が気がよい。

パレットに巻のぐを押し出すとつややかな事なかなかに美しい。幾週かおいてそのまま固まればつややかな上に堅牢の美しさを加える。すでに絵具であるだけで十分に美しい。然してこれが制作画の上では巻のぐとしてだけに終っているところだけの美しい質を失って安っぽくみにくい。大てい巻のぐ以下の質になり下る。

そのものの質を適確に表すことは写実の上でただ一つの要目かも知れないが、それには巻のぐ自身の表質力が相当にあづかるものと思う。明暗、描線、筆触、粗さ、滑かさ、薄く、厚く、盛上げ、これ等だけでも巻のぐは色々な物質に変化する。澄んだ空になる、湿った雲になる、蠟引した常盤木になる、焼山の肌になる、牛肉になる、女の皮膚になる、張り子になる、大福餅になる、羊羹になる、池になる、ガラスになる、象牙になる、ウンコにだってなる。(画家)

やさやかな願い

出口一子

二月の夜空に突然一三三人の尊い人命

カ所の幼年学校がありました。熊本の環境は、最も豪放闊達な気風を醸成してくれていました。

それから四年、二十年の八月二十六日、私の軍隊生活も、満州からの脱出で終りをつけました。満州を脱出した七機のうち、内地到着二機、東京に行けば撃ち落とされるということで郷里鹿兒島の鴨池飛行場を目指しました。熊本の空は澄みわたたり、終戦後の十日間を混乱の中に過してきた私としては、阿蘇、天草等一望にした美しい眺めは、三年間の思出とともに今でも眼底に焼きついております。今日阿蘇を初めて、天草等、私の仕事に関係がありましたのも、何かの因縁と考えております。

戦後の苦しい二、三年私は福岡の大学で過しました。昔歩いた熊本の道を迎って、買出しにも出掛けましたが、お互いに苦しい時でした。大学の三年になると、熊本の戦友二人がやってきて、肥後の娘を貰えということ、熊本の相手宅に連れられて参りました。久しぶりのドブクに、娘さんどころではなく、痛飲のうへ酔いつぶれ、そのお宅の大切な養蜂に放尿、露出した局所をくまなく刺され転倒の次第。余りの不様さに、遂に肥後美人とは縁がありませんでした。今と

して思えば、無粋な肥後の蜂でした。公団の仕事で、熊本を思い出したのが天草架橋。連日の陳情攻勢を、本社の担当課で聞いておりましたが、橋を架け

を奪い去った全日空機の事故には、まったく慄然とさせられた。羽田に父や夫や、またそのほかの肉親を迎えに行っていた人々の心の中は如何ばかりであったろうか。きつと愛する肉親の死に自分も一緒に死んでしまいたいような気持ちはなかつたらうか。人生に対する夢や希望をもつて、これから頑張ろうとしていた人たちが、東京の灯も見えていたであろう瞬間に、死を目前にしていたとは、実に何という不幸だろう。

またあるとき、珈琲を飲みながら三〇年振り旧友に逢うのだと楽しみにして旅に出た寿司屋のおじさんが翌日の夕刊に衝突事故で重体と載っていたこともある。文明の利器の氾濫は明日の日の安全を保証しなくなってしまうのだ。旅行好きの私には身にしみて他人ごととは思えず、生きるということの貴重さを再認識せざるにいられない。

有意義な一日を、人生をと、まったく立派な言葉だが、言うは易く行は難しで、年中自分の立場で理由のない焦燥や怒りに襲われたり、また時には自己反省して謙譲になり丁寧になり、これらが絶えず繰返されて、私の狭い思考の中で「人生とは一体何だろう」と答の出ない間が湧いたり消えたりする。これは人生死ぬまでの課題かも知れないが、「人間は自分が幸福であるということを知らないから不幸である」という言葉には見事

るのに金は二十億円もかかるのに人口はわずか二十万という大蔵省の反対理由をものともされなかつた熊本県のおとさには、敬服いたしました。今秋できあがる今にして思えば、できて当り前のことのようにですが、当時はなかなか大変でした。公団の一部の人で語り伝えておりますが、「天草の乱」というものが公団にあります。大蔵省を如何に通すかということ、手に持ったライターがこわれるほど、机を叩いてわたりあつた本社の二人の課長の激論をさしております。

私自身、肥後モッコスは、思ったことをやりとげる人々だという印象を持っております。

二十四年振りの一月四日より、熊本市に住みつくことになりました。福岡と熊本の高速度道路をつくるというのが、私の仕事です。これで肥後の思出も決定的なものとなりそうです。四月から通過地点に杭を打ってまいります。

今回の高速度道路は、御承知のように全国の各府県の競走のような格好で地元協力が期待されております。県知事以下県民皆様の念願でありますし、私自身の念願でもあります。全国一の完成を、是非実現致したいと思っております。

(日本道路公団熊本高速度道路調査事務所 所長)

に何かを応酬された感がある。

私は週一度ぐらいの割で図書館を利用してはいるが、よくママ・コーナーで質素な様子の母子連れの方が来ていられるのを見かける。そして静かにそれぞれの本を選び出して読んだり、相談したりしている姿をほほえましい気持ちで眺めるとともに、立派な母親のいる家庭の充実した様子がうかがわれる気がする。最近では児童用の書物といつても世界文学や日本文学等の全集がやさしく訳してあるものもあり、その全部を読みつくしていない私は、幼いときにこのような本を親たちがすすめてくれたらと内心思っています。

「星の王子さま」はこどものための本かも知れないが、混沌とした現代においてなんと優しい夢のある話であろうか。こうした本を読むときは音楽を聞くようなたのしみがあり、また苦しい人生を体験した物語など読む時は、自分をむちうたれるような気がする。

読むということは、たしかに私を豊かにし和ませてくれる。友達から良い本を紹介してくれたら、借りて読んだり、私もよかつたと思うものは他の人にもすすめたりする。こうした友人のあることも心に宝をもっていることであって、大切にしなければならぬと思う。

本を読むことに没頭している時は幸せな時かも知れない。いらいらとして文字が目に入らない時はど惨めな時はない。

何ごとも自分の思いのままにならぬ人生ではあるけれどもその中に楽しみを見出して、すこしでも良い人生を送りたいものだとささやかな私の願いを星に祈る気持ちである。

(県立図書館ママコーナー利用者)

肥後狸・肥後蜂の思い出

下荒磯 滋

霜の寒さが腹にしみ通るような朝、立田山の山頂で、兎狩の網師として伏せていました。勢子の声が大分近づいたと思ふ頃、大きなのが飛びこんできました。なんと色の黒い奴、尻尾の大きい奴とされている間に、異様な臭い鼻をつかれました。同僚が狸といひます。当日立田山の肥後狸夫婦が兎に代ってかかったわけですね。二十五年前の私の思い出です。

当時、私は幼年学校の生徒として、三年間熊本に在住していました。故郷薩摩の国を、生まれて初めて六時間の汽車にゆられて熊本入りしておりました。日曜毎に周辺の山々、名所旧跡をくまなく歩き、また川尻のうなぎ井(井にうなぎいっぱい)を腹いっぱい喰べて伸び盛りを過しました。軍隊の学校とはいへ、月謝を払う身分ですので、奔放な団体生活でした。肥後勢が生気といひては、薩摩勢で喧嘩もいたしました。当時全国に六